

葉ネギ圃場における交信かく乱剤を用いたシロイチモジヨトウの防除

交信かく乱剤は、合成性フェロモンにより成虫の交尾を阻害することで次世代の幼虫密度を低下させ、防除効果を得る資材である。新剤型のシロイチモジヨトウ用交信かく乱剤（ビートアーミルア剤、以下BAL剤^{*1}）の試験を行ったところ、高い交信かく乱効果による被害抑制が確認できた。

内 容

2016年頃から淡路地域を中心にシロイチモジヨトウによる農作物被害が多発している。

本種に対して高い殺虫効果を示す薬剤は少なく（本誌2018年8月号参照）、現地からは殺虫剤以外の防除手段が求められている。そこで新剤型のBAL剤を用いて、葉ネギ圃場における防除試験を南淡路農業改良普及センターと連携して実施した。

竹支柱（地上高約60cm）の上部にBAL剤を固定したものを10a当たり25か所となるよう、処理区（220a）内に均一に設置した（写真）。

設置作業は本種の発生が本格化する前に当たる5月15日に実施した。無処理区（15.7a）は処理区から約1km離して設置した。

処理開始直後から、処理区内に設置した性フェロモントラップへの誘引がみられなくなり、試験期間を通じて、高いかく乱効果^{*2}が認められた（図1）。また、7月から実施した被害調査では、処理区における被害株率は無処理区に比べて低くなり、被害抑制効果が認められた（図2）。

今後の方針

交信かく乱剤は、処理面積が小さくなるほど、



写真 葉ネギ圃場に設置した交信かく乱剤

処理区外で既に交尾した雌が飛び込み産卵する機会が増え、効果が不安定になりやすい。関係機関と連携し地域全体での取り組みを推進するとともに、光防除技術との組み合わせ等、小面積でも効果が安定する設置方法を検討し、汎用性の高い技術として確立する。

富原 工弥（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

^{*1}市販されている「ヨトウコンS」の効果をより長持ちさせると同時に、従来の半分の処理量で効果が得られるよう改良した資材。登録準備中。

^{*2}合成性フェロモン剤を圃場に多数配置することで、雄が雌にたどり着けず交尾の機会が減る。同じ理由で交信をかく乱できていれば性フェロモントラップへの誘引数が下がるので、効果判定の指標となる。

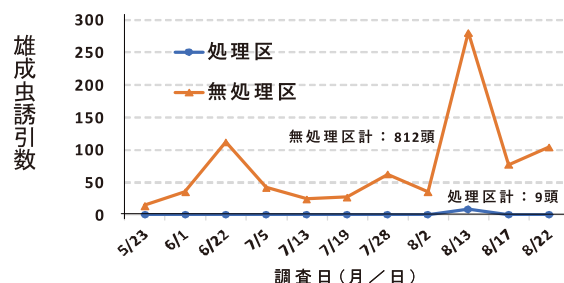


図1 性フェロモントラップへの雄成虫の誘引数の比較

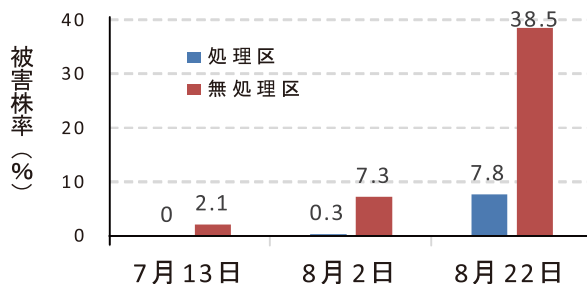


図2 シロイチモジヨトウによる葉ネギの被害株率の比較

（連続した200株を1ブロックとして、9ブロック（合計1800株）を圃場内に一様に設定し、被害株数を調査した2圃場平均）